

Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

# アルカ通信

## ARUKA Newsletter

NO.202  
2020.7.1

\*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

## 加曾利B式土器

— E.S. モースと坪井正五郎のはざまで —

鈴木 正博

### ● 第34回 ● 知の巨人とコロボックル考古学

さて、坪井正五郎は今日の加曾利B式や亀ヶ岡式等を対象として、モースの業績とは完全に独立した考古学分野における形態学の近代化高度化を強力に進め、「コロボックル・モダン」や「コロボックル・コード論」として考古学の方法史に刻印される。しかしながら、「貝塚模様」と「アイヌ模様」との比較論議では「アイヌ・コロボックル論争」(工藤雅樹(1979)『研究史 日本人種論』等々参照)と抵触せざるを得ないため、ここでは人種論について少しく触れておく。

本邦における人類学の創始者である坪井正五郎は、モースの大森貝塚以来の石器時代先住民問題に対し、史伝の限界を超えるべくアイヌの口伝に登場するコロボックルに注目し、アイヌ以前の先住民と推定する。以後、多少の紆余曲折はあるものの折々の議論は成長を極め、コロボックルから構想する最終的な先住民イメージは、北方大陸から列島へと移動した先住民が各地に適応した姿であり、具体的には本邦石器時代の遺物が列島に広く展開する状況(『日本石器時代人民遺物発見地名表』)が措定される。坪井正五郎の欧州留学期では特に人類学と人種学に関しては欧州等における最先端の研究に接する機会となり、以後のコロボックル論が芽えわたる学術基盤を独学で形成する。

「アイヌ・コロボックル論争」とは、アイヌ口伝のコロボックルを先住民の石器時代人民に充てて北方系由来人種と考える坪井正五郎と、石器時代人民を先住民ではなくアイヌと近い縁故と考える立場との論争であるが、ここで三宅米吉を除けば坪井正五郎のみが人類学・人種学の立場を貫き議論した事実注意到すべきである。他方、国史研究としての人種論も当時は盛況であり、人種の議論にとって人種の多様な定義は学問として共通

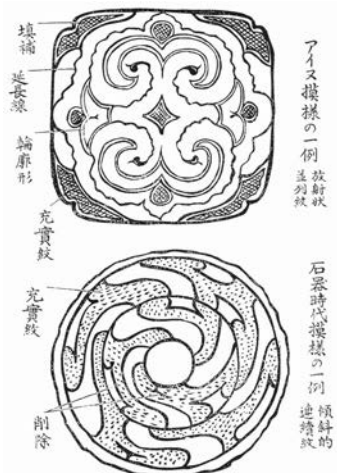
理解に大きな障壁となることは明白との認識から、坪井正五郎は人類学の立場から人類や人種概念や考え方について継続して啓蒙や整理・研究を行い、国史研究のみに制約されない立場を維持する姿勢は注目される(三上徹也(2015)『人猿同祖ナリ・坪井正五郎の真実』等参照)。しかもその真骨頂は現今の人種が国史よりも古い時代から続いて存在することへの強い疑念に存し、「コロボックル風俗考」はアイヌの風俗との違いを誰にでも分かるように考古学から導出した最新人種論で、考古学概論に相当する「石器時代総論要領」が裏付けである。坪井正五郎が標榜・実践する人類学としての考古学は、縄紋人や弥生人・続縄紋人等に弁別する今日の考古学と比較して論理的祖型とも見做されることから、改めて「コロボックル考古学」と命名し、学史上に刻印されることを願う。

とは言え、知の巨人が展開する「コロボックル考古学」は、今日に限らず当時においても理性的な接近が得られ難く、若き学徒・濱田耕作は堂々と「我が天孫人種」(ゴチック体は引用者、以下同様)と謳いつつ国史研究に近い立場から感性的な問い掛けを2回続けて放つ(明治35年9月・11月)。同一誌上にて受ける坪井正五郎は多くの教育的配慮に加え、「石器時代人民即アイヌ説に依らずともアイヌの過去状態を追想する事が出来やうと考へて居る者であります。」と議論の本質を論じて終える。優れた教育法である。

一方、「石器時代人民即アイヌ説」に固執し感性的にどうにも収まりがつかない濱田耕作は、新たに「渦線」・「曲線」・「ヌギ紋様」と「鱗紋」を根拠に、一度決着がついた「貝塚模様」と「アイヌ模様」との比較論議を蒸し返す(明治36年12月「日本石器時代人民の紋様とアイヌの紋様に就て」)。迎える坪井正五郎

は即座に同一誌上で教育的配慮と共に、「兩種模様の比較は人種論の参考になるもの故、或る論を立てた後異なる原因を説明すると云ふよりも、異同を研究した結果之を人種論の材料に用ゐると云ふ方が正しい仕方であると信じます。」と再度議論の本質を諭す。続く翌月には「渦線」・「曲線」・「貫き模様」と「点々紋」について「濱田氏曰」による類似点と「坪井曰」の批判対比表を作成の上、「私は是等を以て類似を説くには足らぬものと考へて居るのであります。」と結論する(明治37年1月「日本石器時代人民の模様とアイヌの模様との異同(承前)」)。続いて兩種模様の異同は「石器時代模様は主として連続的である。アイヌ模様は並列的である。」と一言で纏められるとし、第40図に集約させる(明治37年3月「同(第二百四十四號の續)」)。併せて兩種模様の具体的な不一致を詳細に11項目提示し、「私は断じて別性質のものとして考へて居るのであります。」と結論付ける。

蛇足ながら、濱田耕作の作法は今も継承され、大森貝塚の加曾利B式期研究は、先入観が支配しているようで誠に遺憾である。



▲第40図 「アイヌ模様」と「石器時代模様」のモデル対比

※巻頭連載は隔月です。次回は大村裕さんです。

## 目次

■加曾利B式土器 知の巨人とコロボックル考古学(第34回) 鈴木正博 …1  
■考古学の履歴書 ことのはじまり(第27回) 間壁忠彦・間壁霞子 …2

■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第195回) 山下大輝 …3  
■考古学者の書棚 『Another Room もうひとつの部屋』 中野喬介 …4

## 考古学の履歴書

## ことのはじまりー「…それでは 何だ」(第27回) 間壁 忠彦・間壁 葎子

## 6. 吉備真備の祖母骨蔵器(和銅元年・罔勝・罔依母夫人の墓誌銘を刻む)・「それでは何だ?はまだまだあった」(4)

今回は、真備祖母骨蔵器銘文中の女性呼称「夫人」の文字に注目し、同種の奈良時代墓誌に見る、僅か5例に過ぎない女性呼称を簡略に示した。だが順序とすれば、なぜ「夫人」の文字に注目したかを述べねばならなかったのだ。

実は『記紀』等古代の文献として周知された資料の中で、天皇の配偶者たちに対する呼称表記に、注目してのことであった。特に岸俊男先生の「光明立後の史的意義」『日本古代政治史研究』論文中に表示されている、『日本書紀』中の呼称表記の表にきっかけがあったのだ。

そこには、神武～天武のほぼ40代の間で、神功皇后も女性天皇とし列挙された中、女性天皇は4代だが人物は3名のみ(1人は天智・天武の母で皇極・斉明として再度即位)。その間の男性天皇で、配偶者を皇后とする女性名が無い天皇は僅か4名であり、其の他の天皇にはすべて皇后の記載がある。他の配偶者としては「妃」呼称者がほぼ全般的にいるが、「夫人」呼称は極めて少ないものだった。

この状況中、皇后記載の無い天皇の一人・反正(倭の5王時代)には「皇夫人」と記載。その頃の王墓としては、巨大な前方後円墳の時代でもあり、その棺の多くは竜山石を主体にした長持形石棺の時代に対比される。

その後は、10代もの天皇を経た後のことである。その間には、王家の系譜にも大きな変化があったとされた時代で、古墳の外形・内形・副葬品にも変化が多いことは、周知のことだろう。王墓に比定される古墳も横穴式石室形態が定着し、棺形態も家形石棺が主体となっていた。その頃の注目される天皇欽明の、次の天皇敏達には2人の皇后と「夫人」2人がいる。その後、聖徳太子や推古女性天皇を経た後に天皇となった舒明には皇后のほか「夫人」1人、采女も記されている。この舒明の皇后こそが、後に皇極・斉明と再度位につく女性天皇であり、舒明天皇共々、天智・天武の父母なのである。

この状況を見ると、『日本書紀』世界では、天皇の配偶者呼称に、夫人の位が自然に加わったとは思えない。『日本書紀』編集時の意図も見え隠れる。しかも、天智に対しては皇后・嬪・宮人などと記載するが、最も近い次代の天武になって、皇后・妃・夫人・娶と明確に区別しているのである。

こうした点は、すでに自明のことで、天武朝になっての新たな王朝の国家的ルールの制定が強く意識された結果といえよう。『日本書紀』の天武13年には「八色の姓」として、出自系譜を基本にした身分制度が定められているのである。天皇家身分の別格化の意識が明文化されたともいえる。この時、天皇即位順位にかかわる皇子・皇女を産む、天皇の配偶者身分の確立も強く意識されたのであろう。特に天武・持統にとっては、天智の次代を約束された皇太弟と、その皇后候補者として協力してきたのであった。しかし、天智が次代の天皇に、弟でなく采女を母とした若い息子・大友皇子を意図したことで、壬申の乱となった。このことは、特に持統に強く警戒感を持たせたと思う。

天智には皇后の他に嬪4人、宮人4人、采女と記すが、皇后以外王族も含め、他に多くの女性を召して多くの皇子・皇女を生んだと記す。一方で天武になると、皇族出身者に限定の「妃」、皇后はこの中から選ばれるもの、他に「夫人」3人を定め、これは豪族層出身の女性。他はただ出自や人名を記す女性。この最後に記された「その他女性」の子女として、宗像出身の母を持つ長男高市皇子や、額田姫王との間の十市皇女もいる。こうしてみると、当時「夫人」の文字には極めて政治的意味があったといえる。この「夫人」の文字はむしろ外来の言葉であって、王家以外の別の貴族身分出身者を示す、特定呼称として採用された時期であろう。

天武天皇の死後、既に24～5才の成人であるはずの、持統の息子・草壁皇子が即位せず、皇后の持統が即位した。これは大津皇子の叛乱によるように記されるが、実際には草壁が皇太子として天武が認めていたか不明。草壁即位には最大の障害となる人物は、大津皇子であろう。両人の長幼の順にも疑問があったようだ。大津の母は持統天皇と同母の姉の皇女。皇子間の才能差も明らかだったようだ。母が死んでいる以外、身分も才能も優れたと見られる大津皇子は、天武の死の翌月、叛乱との廉で誅された。『日本書紀』にさえ皇子の死を悼む人々の多かったことを記している。

こうした国家的な王家周辺での身分固定傾向の中で、いままし周辺の女性呼称の実態を見なければ、『母夫人』の意味も軽率には扱えないということであった。

墓誌以上に資料の少ない当時頃の石碑の中では、「上野三碑」の一つ「山の上碑」は、天武10(681)年のものだが、僧長利が母の為に建てたもので、母を「黒売刀自」とする。「金井沢碑」では、少し新しく神亀3(726)年だが、これは三家の子孫9名が、祖先や父母のため結縁したことを記した碑で、氏人とする男性らしい3名の名前のほかは、それぞれ一家の主婦らしい女性5人に「刀自」が付く。

石碑ではないが「薬師寺の仏足石」では、その由来を示す天平勝宝5(753)年の石文中に、「檀主・文室真人智努・為亡夫人…」等の文字が見られる。ただこの時の願主は天武天皇の孫である。この点に関しては次に、長屋王家木簡などと共に、次回に考えたい。

## 間壁忠彦 略歴

1932～2017年 岡山県児島郡甲浦村(現岡山市南区)郡に生まれる

1951年 岡山県立操山高等学校卒業

1955年 岡山大学法文学部法学科卒業

1954～1973年 (財)倉敷考古館学芸員

1973～2006年 同上館長

1968～1998年 広島大学、1968～1980岡山大学非常勤講師(博物館学)、他に

熊本・九州・愛媛・鳥取・千葉大学へ博物館学非常勤講師出講

1982～2005年 就実女子大学非常勤講師(考古学)、ほかに島根大学へ考古学非常勤講師出講

2006～2015年 (財)倉敷考古館学術顧問

## 間壁葎子 略歴

1932年 岡山市門田屋敷(現岡山市中区)に生まれる

1951年 岡山県立操山高等学校卒業

1955年 岡山大学法文学部史学科(日本史専攻)卒業

1955年 岡山大学法文学部副手(池田家文書整理)

1956～2015年 (財)倉敷考古館学芸員

1979～1986年 中国短期大学非常勤講師(歴史学)

1985～2004年 神戸女子大学非常勤講師1年を経て助教授(1991年まで)

教授(2004年まで)、以後同大学名誉教授

1995年 明治大学で論文博士(歴史学)

隔月連載です。次回は井川史子先生です。



## リレーエッセイ

### マイ・フェイバレット・サイト 195

#### 姫路城城下町跡 ～兵庫県姫路市

山下 大輝

いきなりの余談であるが、私は瓦という考古資料に関心を持っている。そのため、発掘調査現場で、瓦が出土すると胸が高鳴る。まさに「フェイバレット」である。しかし遺跡の「フェイバレット」はどうであろうか。リレーエッセイのバトンを頂いたとき、「せっかく書くなら自分が調査した遺跡で書こう。」と、自分自身の発掘調査履歴を振り返った。思い出の数々が溢れ出たが、総じて、考えて・悩んで・苦しんだといった記憶が多かった。そしてなにより、調査した遺跡については、特定の「遺跡が好き。」ではなく、それぞれ異なる内容をもつ遺跡を平等に捉えている自分自身に気がついた。本エッセイでは、そんな私にとって、考古学とは、先人たちへの誠意ではないかとの思いを抱かせてくれた遺跡を紹介したい。

私が紹介する遺跡は、姫路城城下町跡である。近世城下町の他、中世・古代の遺構を抱える複合遺跡である。第1次調査から40年以上経った今日、調査次数は400次を超え、姫路城下の町並み、城下町形成以前の風景が刻々と明らかになってきた。

第408次調査も、それらの調査の1つである。調査地は、城下町絵図によると17世紀中葉から「幡念寺」・「宝泉寺」と記され、調査地北側には、現在も幡念寺が立地している。遺構検出を行うと、半径2～3mの範囲で土師質壺を多数検出し、これらの周辺一帯（調査区の約半分）では、長さ約4m・幅約1m程の不整形の遺構の平面プランを多数検出した。これらの状況から、寺院の墓域に関連する遺構の可能性を私は想定した。

遺構を半截し、掘り進めると、大甕の口縁部を検出した。検出面では、はっきりしなかった遺構プランも、大甕を検出した深さでは正方形の垂直の掘方となった。自身の想定が的中した瞬間だった。その後、明確なものだけでも火葬墓17基・土葬墓56基を検出した。これらの埋葬遺構の時期は、副葬品などから17世紀中葉～19世紀頃のものであると考えられ、絵図の記述を裏付ける成果となった。

特筆すべき調査成果は、土葬墓の埋葬形態が明らかになったことが挙げられる。木槨を形成した後、木槨内に棺である甕を据え、木槨と甕の間を木炭で充填する「木炭・漆喰床・槨木槨甕棺墓」を9基、「方形木槨甕棺墓」を5基検出したのである。従来の研究では、これらの埋葬形態における被葬者は、家老・旗本・藩士といった上級武士だと指摘されている(谷川2010)。しかし、今回これらの埋葬遺構から出土した人骨は、その多くが女性であることが明らかとなったため、上級武士の近親者の可能性が



▲埋葬遺構検出状況

考えられる。このような形態の埋葬遺構の検出は、姫路市では初であり、兵庫県下でも事例は少ないと思われるため、近世播磨の墓制を考える上で非常に意義があった。

「上級武士の墓」・「姫路市初」などと調査成果としては、華やかに聞こえる。調査担当であった私にとっても「姫路市初!」と、高揚する気持ちが多少湧いたが、それは感情全体の一握りほどの思いであった。残る感情は、埋蔵文化財の発掘調査という大義名分の下、故人の墓を根こそぎ調査し、破壊してしまうことへの申し訳なさ、数百年後に自分自身の墓が発掘されていると想像したときに抱くなんとも言えぬ気持ちであった。

しかし、「もし発掘調査が行われず、開発行為が行われていたとしたならば、今ここで私が調査している先人たちの墓は、未来永劫、人々の目に触れることはなく、また江戸時代から続いてきた墓が存在したという事実さえも消滅してしまっていた。」との考えや『「遺跡の声なき声を聴く。」』というような発掘調査を表現した言葉を聞いたことがあるが、今こそ、埋葬された先人たちに思いを馳せ、声なき声を聴き、姫路ひいては播磨における近世墓制の実態を考古学的に明らかにすることはもちろん、当時の城下町の景観、埋葬された人の姿に光を当てることこそが、我々の使命の1つではないか。』との思いがこみ上げ、奮起した。その結果、先述した成果を得ることができた。反省すべき点は多々あり、完璧だと言うには程遠い調査ではあったものの、開発によって失われていく遺跡、今回の場合は、故人の墓に対し、記録保存という形で新たな命を吹き込むことに成功したと自負している。

この調査で、考古学ないし発掘調査は、過去に生きた人々に対して、誠意・真心をもって行わなければならないものだとは私は改めて思った。これは埋葬遺構を調査し、故人の愛用品と考えられる副葬品や丁重に埋葬された棺、人骨を目の当たりにし、過去に生きた「人」という存在をこれまでになく身近に感じただけでなく、当時の人々の思いに少し近づくことができた気がしたことによるものと思う。過去の人々からすると、我々は突如として、「埋蔵文化財」と銘打ち、過去の人々が生き、そして眠る遺跡へと立ち入る。その際、懸命に遺構・遺物と向き合い、過去の人々にも「埋蔵文化財」を理解してもらえるように調査を行うことが大切だと感じたのだ。埋蔵文化財行政の一端を担う立場にある者として、この経験・思いを大切にしたいとは私は思う。

姫路城は、今日も多くの観光客を姫路に誘っている。城の眼下に望む城下町は、いつものように姫路の活気を支える。江戸時代から連綿と続いてきたであろう城下町の活気は、そこで暮らした人々の絶え間ない営みによって生み出され、それをいかなる時も引き継いできた人々の歴史の結晶ともいえるであろう。姫路城を訪れた際は、姫路の活気を支えた人々の軌跡である姫路城城下町跡にも思いを巡らせながら、城下町を散策していただきたい。

#### 参考文献:

- 谷川章雄 2004「江戸の墓の埋葬施設と副葬品」『墓と埋葬と江戸時代』江戸遺跡研究会
- 姫路市教育委員会 2020「姫路城城下町跡—姫路城跡第408次発掘調査報告書—」『姫路市埋蔵文化財センター調査報告』第97集

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは江上 輝さんです。

## 考古学者の書棚

## 「Another Room もうひとつの部屋」

海野弘 著／LIXIL出版(2019)

中野 喬介

國學院栃木短期大学に在学中、恩師である酒寄雅志先生の講義において、はじめてトイレ遺構・便所遺構に関する知識を得た。渤海史の研究者でもある先生は、秋田城跡で発見されたトイレ遺構を取り挙げ、遺構の沈殿槽の堆積土から発見された有鉤条虫の卵を、秋田城の人々が豚食を日常的に行っていた事を示す証拠として紹介された。古代の日本列島では、オホーツク文化を除けば豚食の習慣がない事に加え、日本海を通じて渤海と数多くの交流記録が残る事を鑑み、渤海使が秋田城で受け入れられた可能性があるという。当時講義を聞いた私は、考古学的手法によってトイレ遺構からこれほどまでに貴重な情報を取得できるものだと感動し、それ以降、専攻や職務とは直接関係ない分野においても何かとトイレに関する事象に気を配るようになった。

コロナ禍が本格化する直前、銀座のLIXILギャラリーのミュージアムショップでこの本に惹かれたのも、上記の学生時代の教えがあつたのこころと思う。「Another Room もうひとつの部屋」は敬遠されがちなトイレの歴史を文化史的な観点から集成・検討した一冊である。構成は以下の通りである。

はじめに トイレのベル・エポック  
ラウフェン・サニタリー・ミュージアム・コレクション  
もうひとつの部屋 秘められたトイレの歴史  
(トイレの起源と神話／古代のトイレ／中世のトイレ／  
ルネサンスのトイレ／バロックとロココのトイレ／  
十九世紀のトイレ／二十世紀のトイレ)  
おわりに  
ヨーロッパ・トイレ史年表

はじめにの副題に採用されたベル・エポック(良き時代)とは、美術史の用語でもあり、十九世紀末から第一次世界大戦までの豊かな時代を指す言葉である。パリにおいてボン・マルシェ百貨店が創業され、万国博覧会が開かれた時代であり、消費文化が本格的に花開いたことで、いわゆるファインアート以外の家具・調度品、ファッション、グラフィックといった生活に密着する諸分野においても様々な変化が起きた転換期となった。著者の海野氏は、この豊かな転換期がトイレ、ひいては西洋的なバスルームにおいても訪れた時代であると指摘している

ヴィクトリア朝後期から末期(1970～1980)において、給排水設備が整えられ室内の水洗便所のシステムが確立した事、バス・トイレ用の陶磁器の工業生産が成功した事を二大要因とし、身嗜みを整える総合空間である今日的なスタイルのバスルームが確立したというのが概要だ。こうして誕生したバスルームは万国博覧会等によって世界中に伝播することになり、諸外国の生活様式にも影響を与え、同時に新しい種類の便器が作られる契機ともなったという。

本書ではラウフェン・サニタリー・ミュージアムの収蔵品のカラー図版も楽しめる。国内の衛生陶器の大手企業であるLIXIL(INAX)やTOTOがミュージアムやギャラリーを有する

ように、スイスに本社を置く衛生陶器の名門ラウフェン社も博物館を持ち、十八世紀～二十世紀の便器やその関連器物の収集・展示を実施しているが、掲載された便器や手洗い器を見るとその装飾性や形状に美術的価値を見出す気持ちがよく理解できる。このコレクションは、国内においても1988年に当時のINAXにおいて展示されたことがあり、本書の底本である『ヨーロッパ・トイレ博物誌』(INAX出版)がこのコレクション展の展示図録を兼ねて出版された背景がある。

本書は、海野氏の担当部分のみを再録し最小限の校正を行い出版されているが、西洋古今のトイレに関して、古記録や考古学的成果のみならず、芸術・文学といった文化史的な側面から検討された内容は全く古さを感じさせない。著者の海野弘氏に関してはメディアへの露出も多く、ご存じの方も多いだろうが、月刊『太陽』(平凡社)の編集長を務めた博覧強記の美術評論家である。例えば古代のトイレの項目においては、ローマ文化のトイレ遺構ともいべきフォリカ(公衆便所)を写真で紹介すると同時に、皇帝ネロの側近であったペトロニウスが書いたとされる『サテュリコン』の内容を引用し、ローマ貴族の排泄に対する羞恥心の希薄さを示している。掲載されるローマのフォリカに、華やかな装飾があっても間仕切りや目隠しの類がないというのにも納得がいく描写である。

このように、当時のトイレ事情(生活の様子)を様々な面から探る本書であるが、巻末のヨーロッパ・トイレ史年表も秀逸である。西欧におけるトイレ文化の隆盛を追えるわけだが、概観してみると、不思議と日本のトイレの隆盛ともリンクする部分があるように思える。同じ国の中であつても地域性を考慮すると、西欧の古代と日本の古代を同一視できるわけがないので軽はずみに比較できないが、古代にあった優れたトイレの文化が中世においては忘れられるという点には共通性が感じられる。

秋田城のトイレ遺構は8世紀後半から9世紀第一四半期の間機能していたという。つまり奈良時代後半から平安時代のごく初期に、これほど良くできた排水機構及びトイレが完成していた一方で、平安時代末期から鎌倉時代初頭に成立した『餓鬼草紙』では、洛中の路において人目を気にせず排便をしている描写がある。それこそ地域性はもちろん、人々の階級を考える必要があるが、古代から中世にかけての文化の後退がトイレ事情からも伺えるのではないかと思える描写だ。それは古代ギリシアやローマにおいて完備された水洗トイレが、中世ヨーロッパで忘れられるのにもどこか似ているように思える。文化の後退はどこでも起こり得て、それが食糧生産や建築、芸術分野のみならずトイレや下水からも分かる、というのがひとまずの答えだろう。

## アルカ通信 No.202

発行日 2020年7月1日  
企画 角張淳一(故人)  
発行 考古学研究所(株)アルカ  
〒384-0801 長野県小諸市甲49-15 TEL 0267-25-0299  
aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp